教育研究業績書

2016年10月01日

所属：健康・スポーツ科学科　　資格：講師　　氏名：渡邉　昌史

研究分野	研究内容のキーワード
スポーツ人類学、スポーツ社会学、スポーツ史、遊戯論、台湾原住民族研究	スポーツ、文化、遊戯、身体、台湾原住民族文化

学位	最終学歴
博士（人間科学） 修士（人間科学） 修士（教育学） 学士（文学）	早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程健康科学専攻　修了 早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程健康科学専攻　修了 東京学芸大学大学院教育学研究科社会科教育専攻歴史学第一講座　修了 早稲田大学教育学部社会科地理歴史専修　卒業

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 学生の授業外における学習促進のための取り組み	2015年04月～現在	授業時間外の学習を促進するために「独自学修ノート」の作成（授業１回につき最低１ページ以上）を義務付けた。適宜提出を求め、学習状況を確認すると共に、アドバイス等を記入している。
2. 学生を授業に巻き込むためのディスカッションの実施	2015年04月～現在	比較的大人数の講義において、学生の主体的な参加を促すためにグループディスカッションを実施。各グループの発表を批評し合うことによって、緊張感を持たせている。
3. マルチメディア機器を利用した授業を展開	2014年04月～現在	プレゼンテーションソフトを用いて、授業内容を提示しながら説明を加える授業を展開。プレゼンテーションは文章だけでなく、教員が撮影した写真、動画なども活用しながら、学生が「分かりやすい」と思えるように授業を行っている。
2 作成した教科書、教材		
1. 『21世紀スポーツ大事典』大修館書店	2015年01月	スポーツにかかわるすべての人の知識の拠り所として刊行された事典を分担執筆。 執筆箇所（単著）：16章スポーツと民族「台湾原住民スポーツ大会」pp. 0625-0628
2. 『知るスポーツ事始め』明和出版	2010年06月	スポーツ史、スポーツ文化論などに想定される教科書を分担執筆。 執筆箇所（単著）：「『より速く』の追求、馬と人の意外な共通点？」「柔道では何段が最も強いのでしょう？」「スポーツに誤審はつきもの？：ハイテクでミスは防げないのか」pp. 135-139，pp. 171-175，pp. 205-209
3. 『最新スポーツ科学事典』平凡社	2006年09月	体育・スポーツに関する半世紀にわたる科学的研究の成果、及び最新の知見や情報をも盛り込み刊行された事典を分担執筆。 執筆項目（単著）：スポーツ人類学分野の台湾原住民スポーツ大会、ノルティギ、フナグロ、ブラジル先住民スポーツ大会。p. 794、p. 795、p. 796
4. 『教養としてのスポーツ人類学』大修館書店	2004年07月	スポーツ人類学の教科書を分担執筆。 執筆箇所：「民族の生活とスポーツ」（朝鮮半島．台湾．中央アジアの遊牧民．オセアニア．カナダの木こり競技．相撲．ボートレース．馬のスポーツ．盤上遊戯．養生法・癒し）では、文化としてのスポーツを概説するとともに、多数の写真に説明を付しわかりやすく明示した。 pp. 244-246、p. 250、p. 258、p. 261、pp. 267-268
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 天理大学体育学部　非常勤講師	2015年04月～現在に至る	担当科目：スポーツ文化論
2. 早稲田大学グローバルエデュケーションセンター　非常勤講師	2014年04月～現在に至る	担当科目：スポーツと文化01・02
3. 武庫川女子大学健康・スポーツ科学部　非常勤講師	2013年04月～07月	担当科目：体育原理
4. 駿河台大学現代文化学部　非常勤講師	2012年04月～2014年03月	担当科目：スポーツ史Ⅰ、スポーツ史Ⅱ
5. 同志社大学スポーツ健康科学部　嘱託講師	2010年04月～現在に至る	担当科目：スポーツ人類学
6. 早稲田大学オープン教育センター　非常勤講師	2009年04月～2014年03月	担当科目：スポーツと文化01・02
7. 天理大学体育学部　非常勤講師	2006年04月～2014年03月	担当科目：健康スポーツ科学Ⅰ・Ⅱ（バレーボール、バスケットボール）、体育原論、スポーツ社会学、技と身体
8. 早稲田大学災害研究所　研究員	2005年04月～2006年03月	
9. 早稲田大学スポーツ科学学術院　助手	2004年09月16日～2006年03月31日	
10. 早稲田大学スポーツ文化研究所　研究員	2004年04月01日～2006年03月31日	
11. 早稲田大学トップパフォーマンス研究所　研究員	2003年07月～2006年03月	

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
12. 早稲田大学スポーツ科学部　助手	2003年04月01日～2004年09月15日	
13. 早稲田大学高等学院　非常勤講師	2001年04月～2007年03月	担当科目：倫理、政治経済、現代社会
14. 早稲田大学体育局　職員	1992年04月01日～1998年03月31日	
4 その他		
1. 文部科学省委託事業総合型地域スポーツクラブ育成推進事業　総合型地域スポーツクラブクラブ育成アドバイザー	2006年4月～2010年3月	奈良県内39市町村における総合型クラブの設立支援及び運営指導にあたった。
2. ＪＯＣ強化スタッフ（情報戦略）として、柔道ナショナルチームのサポートにあたっている。	2001年１月～現在	
3. 早稲田大学柔道部　寮監	1994年03月～2004年06月	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 全日本スキー連盟公認バッジテスト・級別テスト１級	2015年3月7日	
2. 学校図書館司書教諭資格	1993年3月	
3. 講道館柔道　四段	1993年	
4. 中学校教諭一種免許状（社会）	1992年3月	
5. 博物館学芸員資格	1992年3月	
6. 高等学校教諭一種免許状（社会）	1992年3月	
7. 高等学校教諭一種免許状（柔道）		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 長岡京市青少年・スポーツ課主催『すくすく健康フォーラム』にて基調講演、シンポジウム司会を担当	2009年12月5日	
2. 2009年アジア柔道選手権大会	2009年05月23日～24日	全日本柔道連盟派遣により、広報活動に従事（台湾・台北）
3. 奈良県スポーツ指導者研修会において、講演「スポーツ指導者の心得について」を実施	2008年11月22日	
4. 奈良県スポーツリーダー養成講習会兼スポーツ少年団認定員養成講習会において、講義「文化としてのスポーツ」を担当	2008年02月2日	
5. 奈良県スポーツ指導者専門委員会、講演「スポーツ指導者の有効活用に向けて」を実施	2008年01月31日	
6. 地域住民向けフォーラムにおいて、基調講演「スポーツを通じた地域づくり」を実施	2007年12月1日	
7. 奈良県クラブマネジャー養成講習会において、講義「総合型地域スポーツクラブの現状」を担当	2007年10月27日～10月28日	
8. 奈良県体育指導委員連絡協議会において、講演「総合型地域スポーツクラブについて」を実施	2007年05月12日・2007年08月25日	
9. 奈良県スポーツリーダー養成講習会兼スポーツ少年団認定員養成講習会いおいて、講義「トレーニング論」「運動適正テスト」を担当	2007年02月04日	
10. シンポジウムにて講演「天理市のスポーツ振興についての提言」を実施	2006年12月9日	
11. 文部科学省委託事業総合型地域スポーツクラク育成推進事業における奈良県体育協会クラブ育成アドバイザーとして、県内39全市町村における総合型クラブの設立・運営の指導にあたった。	2006年04月1日～2010年03月31日	
12. EUROPEAN JUDO UNION SENIOR CHAMPIONSHIPS 2003	2003年05月15日～21日	全日本柔道連盟派遣により、大会及びヨーロッパ柔道界の情報収集をおこなう。（フランス・パリ）
13. 第14回釜山アジア競技大会柔道競技 日本代表選手団（柔道）スタッフ	2002年09月30日～10月04日	全日本柔道連盟の派遣により、ビデオ撮影及び試合分析をおこなう。（韓国・釜山）
14. HUNGARIA CUP ″A″CATEGORY WORLD TOURNAMENT 2002　日本代表選手団スタッフ	2002年03月2日～3日	全日本柔道連盟の派遣により、ビデオ撮影及び試合分析をおこなう。（ハンガリー・ブタペスト）
15. JUDO WORLD MASTERS MUNICH 2002 日本選手団スタッフ	2002年02月23日～24日	全日本柔道連盟の派遣により、ビデオ撮影及び試合分析をおこなう。（ドイツ・ブッパータール）
16. 2001ミュンヘン世界柔道選手権大会 日本選手団支援員	2001年07月26日～29日	全日本柔道連盟の派遣により、ビデオ撮影及び試合分析、選手へ情報提供をおこなう。（ドイツ・ミュンヘン）
17. EUROPEAN JUDO UNION SENIOR CHAMPIONSHIPS 2001	2001年05月18日～20日	2001年05月18日～20日 全日本柔道連盟派遣により、大会及びヨーロッパ柔道界の情報収集をおこなう。（ハンガリー・ブタペスト）

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
18. IJF MILLENNIUM CUP 日本代表選手団スタッフ	2001年03月4日	全日本柔道連盟の派遣により、ビデオ撮影及び試合分析をおこなう。（ハンガリー・ブタペスト）
19. HUNGARIA CUP ″A″CATEGORY WORLD TOURNAMENT 2001　日本代表選手団スタッフ	2001年03月2日～3日	全日本柔道連盟の派遣により、ビデオ撮影及び試合分析をおこなう。（ハンガリー・ブタペスト）
20. JUDO WORLD MASTERS MUNICH 2001　日本代表選手団スタッフ	2001年02月24日～25日	全日本柔道連盟の派遣により、ビデオ撮影及び試合分析をおこなう。（ドイツ・ミュンヘン）
4 その他		
1. 学友会　競技スキー部　部長	2016年04月01日～現在	
2. 入試　　委員	2016年04月01日～現在	
3. 健康・スポーツ科学部/健康・スポーツ学会「パンフレット」作成担当	2016年03月～現在	
4. 『キャンパスガイド』編集委員	2015年06月～現在	
5. 学生委員	2015年04月01日～現在	
6. 健康・スポーツ科学会　顧問	2015年04月～現在	
7. 健康・スポーツ科学科　健康・スポーツ学科幹事会　顧問	2015年04月～現在	
8. 学友会　競技スキー部　副部長	2015年04月～2016年03月	
9. 学友会　サッカー部　副部長	2014年06月01日～現在	
10. クラブ強化対策委員会　委員	2014年06月01日～現在	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. スポーツのモノ語り	単	2016年03月	ダイコロ株式会社	大修館書店発行『体育科教育』に連載した「スポーツのモノ語り」（2014年３月号から2016年２月号）をまとめ刊行。
2. 21世紀スポーツ大事典	共	2015年01月	大修館書店	中村敏雄、髙橋健夫、寒川恒夫、友添秀則編集主幹。執筆者多数 スポーツがグローバルなものとして認識された1900年以降に焦点を当てた総合事典。概念、歴史から、人種、ジェンダー、障がい者、オリンピックに至るまで、26のテーマからスポーツ事象を解説している。 執筆箇所（単著）：16章スポーツと民族「台湾原住民スポーツ大会」pp.0625-0628
3. 台湾原住民族の音楽と文化	共	2013年12月	草風館	2012年4月に天理大学で開催された国際学術シンポジウム「台湾原住民族の音楽と文化」の成果を元に新たな論考を加え、刊行されたものである。 編者：下村作次郎、林清財、笠原政治、孫大川。執筆者：森口恒一、サウニャウ・チュヴリュヴリュ、林志興、鄧相揚、洪秀錦、陳？凡、魚住悦子、松岡格、渡邉昌史 、早坂文吉、高英傑、張炎憲、周婉窈、馬場美英、劉麟玉、野林厚志、三尾裕子。小林公江、林宜妙、吉田裕彦、塚本善也、中村平。森田健嗣、橋本恭子、 執筆箇所（単著）：第３章「台湾原住民族の「土俵」をもつ相撲―伝統文化における本質主義と異種混交性―」pp.199-121。 知本プユマにおける伝統文化について、収穫祭とそこで実修される相撲との比較から論じたものである。
4. 身体に託された記憶：台湾原住民の土俵をもつ相撲	単	2012年01月	明和出版	台湾原住民族の知本プユマの収穫祭で実修されている「相撲」の文化変化について、フィールドワーク及び文献資料の交差から明らかにした。 もともと組み相撲のマリウォリウォスがあったものが、帝国日本の植民地統治により、日本相撲を行うようになった。戦後の日本文化の禁止、中国化、キリスト教の布教の文脈のなかで相撲が再解釈された結果、今日の知本相撲となった。知本相撲が行われる場である収穫祭は本質性を求め正統化された。これに対し、知本相撲は日本の文化的影響も含んだ異種混交であることによって、固有伝統文化として正当性を持っている。 全237ページ
5. 知るスポーツ事始め	共	2010年06月	明和出版	本書は平成15年から平成21年にかけて、『スポーツジャスト』（日本体育協会スポーツ少年団情報誌）に連載の「スポーツを楽しく観るために」を元に単行本化されたものである。 編著者：石井隆憲、田里千代 執筆者：青山健太、阿部貴弘、石井綾、石井昌幸、一階千絵、大家千枝子、大沼義彦、荻浩三、金子元彦、金田英子、木内明、齋藤恭平、佐久間康、佐野昌行、下谷内勝利、瀬戸邦弘、高野一宏、高橋京子

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
				、谷釜尋徳、田簑健太郎、筑紫智行、福井元、細谷洋子、松尾順一、松浪登久馬、水谷秀樹、渡邉昌史、綿貫慶徳 執筆箇所（単著）：「『より速く』の追求、馬と人の意外な共通点？」「柔道では何段が最も強いのでしょう？」「スポーツに誤審はつきもの？：　ハイテクでミスは防げないのか」 pp.135-139，pp.171-175，pp.205-209
6. 最新スポーツ科学事典	共	2006年09月	平凡社	本事典は（社）日本体育学会が体育・スポーツに関する科学的研究を半世紀以上にわたって推進してきたその成果を網羅するとともに、最新の知見や情報をも盛り込み刊行したものである。対象分野は人文科学・自然科学全般に及ぶ。 社団法人日本体育学会監修による著者多数 執筆項目（単著）：スポーツ人類学分野の台湾原住民スポーツ大会、ノルティギ、フナグロ、ブラジル先住民スポーツ大会。p.794、p.795、p.796
7. 教養としてのスポーツ人類学	共	2004年07月	大修館書店	本書は、文化としてのスポーツをいかに読み解いてゆくのかを、スポーツ人類学における主な研究テーマと研究手法から提示したものである。 著者：寒川恒夫編、宇佐美隆憲、熊野建、ほか48名 執筆箇所（単著）：「民族の生活とスポーツ」（朝鮮半島．台湾．中央アジアの遊牧民．オセアニア．カナダの木こり競技．相撲．ボートレース．馬のスポーツ．盤上遊戯．養生法・癒し）では、文化としてのスポーツを概説するとともに、多数の写真に説明を付しわかりやすく明示した。pp.244-246、p.250、p.258、p.261、pp.267-268
8. 「危機管理の社会学」を目指して	共	2003年01月	高木書房	本書は社会学、文化人類学、歴史学ならびに他の社会科学において使用される諸概念を適用し、災害時における個人、集団、組織の行動を体系的に分析し、既存の社会科学における作業概念の批判と検証を行うことを目的として刊行された。 著者：田中伯知、浜川栄、川崎高志、大島信三、渡邉昌史、渡辺淳志、小島健介、福地建夫 執筆箇所（単著）：第四章「スポーツと国家・民族：モンゴル国のナーダムに見るエスニシティ」、pp.95-117 モンゴル国における民族スポーツの祭典『ナーダム』の現地調査をもとに、スポーツ人類学の視点から民族アイデンティティについて論じた。
9. 全日本柔道連盟50年誌	共	2000年03月	財団法人全日本柔道連盟	本書は全日本柔道連盟50周年を記念して出版された。 編集委員会（松下三郎、横尾一彦、大山昭三、尾方利光、金坂茂、坂本羯正、高須賀靖彦、永井多恵子、渕辺吉博、三浦照幸、三浦登、山口香、渡邉昌史） 執筆箇所（単著）：第四部資料編（年表と記録）「国際男子編」「国際女子編」「国内編 全日本、警察・実業、学生、高校・中学・少年、その他」「日本柔道史年表1945-1999」．pp.3-168。 内容は昭和20年（1945年）から平成11年（1999年）までの国内外の柔道の動向、試合記録や試合審判規定の変更など詳細をまとめたものである。
2 学位論文				
1. 臺灣原住民の相撲変容にみるアイデンティティ：知本プユマの言説からのアプローチ	単	2006年01月	早稲田大学大学院人間科学研究科　博士学位論文	台湾の先住民であるプユマの知本居住集団（知本プユマ）に伝承される相撲をとりあげ、相撲をめぐる諸事象の変容の語りの中に民族のアイデンティティ形成を読みとったものである。研究目的を達成するために、先行研究の比較検討、日本統治時代から今日までに公刊された知本プユマに関する民族誌とフィールドワーク情報とを主資料として、これを歴史学的と人類学的に分析する方法をとった。
2. 五島列島の綱引にみる文化変化	単	2001年01月	早稲田大学大学院人間科学研究科　修士学位論文	日本の綱引研究史において、いわば空白地域とでもいえる長崎県五島列島を対象として、フィールドワークによる事例収集及び文献資料、それぞれの文化分析の交差からその変化の考察を行った。第１章では「ヘトマト」、第２章では綱引との比較の視座として同地にみられる蹴鞠について論じ、第３章にて事例の総括と考察を行った。そして、第４章にて綱引を構成する文化の３つの側面から考察しまとめたものである
3. 惣村における宮座についての研究：近江国得珍保今堀郷を事例として	単	1998年01月	東京学芸大学大学院教育学研究科　修士学位論文	近江国得珍保今堀郷は比叡山延暦寺(山門）の保護によりその勢力を伸ばした。「今堀日吉神社文書」は、その商業発展の様子や郷民の自営と進出、政治的弾圧に対する防御、権力との結びつき、あるいは早い時期から形成されていった「宮座」「惣」などの民衆的組織などについて具体的かつ豊富に物語る史料

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
				である。同文書から年中行事の成立過程を分析することによって、宮座の展開の再構成を行ったものである。
3 学術論文				
1. 絵馬に描かれた身体及び技芸の表象分析（査読付）	単	2015年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編，第62巻，pp. 41-48	絵馬は民間信仰を基盤として伝承され、慣習化されたものであり、神仏に対する願掛けは他人にあからさまにできない事柄が極めて多い。そこに絵馬の図柄に託された人と神仏のコミュニケーションが存在する。 本研究は、これまであまり関心をもたれていなかった身体及び技芸に関わる図柄の分析といった視座から、そこに託されたコードを掘り起こしたものである。
2. 「橿原道場」設立に関する一考察～「国民統合」とスポーツツーリズム～	単	2015年03月	奈良体育学会「奈良体育学会研究年報」第19号，pp. 13-18	昭和15(1940)年に橿原神宮の附帯施設としてつくられた「橿原道場」。本研究では、橿原道場設立の経緯について、国民統合と資本の論理の２点から考察を進めた。紀元2600年奉祝の動きに端を発した観光による経済振興、大運動場を所有したい県、朝日新聞の部数拡張策、これらの政官民の利害が一致した結果、寄付と勤労動員によって橿原道場は完成をみた。これは戦前におけるスポーツツーリズムの一つの到達点でもあった。
3. 国民文化としての「国技」相撲の誕生	単	2014年04月	2010年第１回アジアスポーツ人類学会国際学術研究大会論文集	相撲は近代以降、相撲節会に由来する「伝統」を再構成することにより、純粋な日本文化の身体的実践として創られてきた。このプロセスは、日本が目指した近代国家にふさわしい共通語「国語」の創成と模索の道のりとも重なる。「国語」確定のための文化装置として、今日まで数限りない国語辞典が世に出てきた。本研究では明治初めに文部省によって編纂が始まった『語彙』以来の32種類の国語辞典について、相撲、国技の項目の変容を分析した。
4. 公園空間における文化表象の変化－奈良公園にみるスポーツ施設の変遷からの考察－	単	2014年03月	奈良体育学会「奈良体育学会研究年報」第18号，pp. 69-74	奈良公園は明治期、寺社境内地を公園地としたことに始まる。大正末期からスポーツ施設の整備が進み、近代の公園へと姿を変え、スポーツの「聖地」としての性格をもつようになった。昭和30年代以降、スポーツ施設が除去されて行くことにより、こんにちの風致景観が創られてきた。信仰の地であった奈良公園はモダンなスポーツ施設の開設によって「近代」の公園となり、その除去によって古都奈良の文化的顕現の象徴となったことを論じた。
5. 日常語としての「相撲」概念の形成：近代国語辞典にみる語釈の変遷からの考察(査読付)	単	2014年03月	日本スポーツ人類学会「スポーツ人類學研究」第15号，pp. 19-43	「相撲」概念がどのように形成されてきたのかについて、近代国語辞典の語釈の変遷から考察した。近代語としての「相撲」概念は『言海』（1889）に取り上げられることによって始まり、２つの概念（相撲節会、勧進相撲の流れをくむ大相撲）が提示された。史実に基づき正統性を保証された相撲節会に対し、大相撲の評価は時代背景の影響を受けた。この異なる概念理解は昭和初期の辞典まで継承された。『辞苑』（1935）は大相撲の評価を一変させ、神話的古代からのいっかんした相撲史の系譜のなかに組み込んだ。よって、日常的に使われる言葉としての「相撲」概念の出現時期はここに特定できることを明らかにした。
6. 剣道で教える「伝統的な行動の仕方」「伝統的な考え方」を求めて	単	2012年01月	大修館書店「体育科教育」第60巻第１号，pp. 44-47	学校教育において、剣道で教えることが可能な「伝統的な行動の仕方」「伝統的な考え方」とは何か。方法論の上では身体技法と精神文化に分けて考える方が有益である。技法はこれまでどおりの指導実践の豊富な蓄積があるが、技法の指導だけで剣道の思想、背景を教えることは難しい。今日、「伝統的」として求めるべきは精神文化の方である。だが、その文化性をどこに置くのかによって、剣道の性格はまったく異なったものとなる恐れもはらんでいることを論じた。
7. なわとび運動の起源と歴史	単	2011年09月	大修館書店「体育科教育」第59巻第９号，pp. 10-14	世界各地にみるなわとびの事例から説き起こし、時代時代における意義づけの変遷について論じた。17世紀のプロテスタントの思想では、子どもの遊戯であったなわとびを大人たちへの教訓への寓意として用いた。身体運動としての意義はグーツムーツによって初めて見出された。日本近世では記録に見られず、明治以降に登場し、戦前は国策で奨励された。戦後はトレーニングから健康、健康からパフォーマンスへとその目的が変遷してきていることを明らかにした。
8. 「他者」が文化を語ることのむずかしさ：台湾でのフィールドワークから考えること(査読付)	単	2011年03月	天理大学人権問題研究室「天理大学人権問題研究室紀要」第14号，pp. 37-49	これまでフィールドワークを実践してきたなかで経験した事柄から、「他者」が文化を語る行為をめぐる問題性を論じたものである。 調査する側の正当性は時と場合によって邪魔者性、暴力性をもはらむものであることは避けられない。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				そもそも調査行為の正当化は可能であるかを、調査される側の語りからとらえ直し、そこから文化を語る行為は誰のものかを具体的事例から論じ、問題提起を行った。
9. 日本統治下における台湾原住民の祭祀儀礼の変容	単	2010年05月	朋友出版「日本史学年次別論文集 近現代２」pp.554-546	学術文献刊行会から依頼により、「研究年誌」第51号，pp.91-103掲載論文が収録された。
10. 国家・社会を越境する身体文化「相撲」	単	2010年03月	天理大学地域文化研究センター「理念・哲学・スピリットの世代間継承および地域内あるいは地域間伝達のプロセスの研究報告書」	天理大学地域文化研究センター共同研究会のテーマ「形のない『理念』が、どのように『継承』『継続』『伝播』されるのか」について、さまざまな分野の研究者が取り組んで来た成果の論文集である。担当テーマは身体を通じた世代間伝承であり、台湾原住民族の知本プユマにみる相撲を事例として、国家・社会を越境する身体文化について論じた。
11. 知本プユマの相撲にみる文化変容：身体文化の歴史的経験	単	2009年11月	亜州体育人類学会「亜州体育人類学論壇論文集　体育・人類・文化」pp.65-70	アジアスポーツ人類学会設立記念の学会大会（北京・清華大学）における論文集である。 台湾原住民族の知本プユマにおいて実修されている相撲について、身体文化をキーワードに文化変容について論じた。
12. 日本統治下における台湾原住民の祭祀儀礼の変容	単	2007年03月	早稲田大学高等学院「研究年誌」第51号，pp.91-103	台湾原住民の祭祀儀礼が、日本統治下の原住民政策の「理蕃」政策によって、どのように変容したのかについて文献資料から明らかにしたものである。結論としては次の６点に集約された。①日本的農村化、②合理化、③神社崇拝との一体化、④「空間」の喪失、⑤世俗化、⑥媒介者（ミドルマン）の存在。
13. 中国・少数民族伝統体育運動会にみるアイデンティティの諸相（査読付）	単	2006年05月	日本体育学会「体育学研究」第51号第３巻，pp. 287-298	中国・全国少数民族伝統体育運動会の現地調査とその分析を通して、担い手である少数民族がどのようなアイデンティティを形成してきたのか、また中国の「人民」形成にどのような働きをもたらしてきたのかについて考察した。 少数民族運動会及び民族スポーツ政策は国家による文化的な戦略として行われ、少数民族的アイデンティティから中華民族的へ、さらには国家的なものへと変化してゆく過程を民族スポーツのルールや用具の変容から実証的に明らかにした。
14. 五島列島にみる綱引についての研究	単	2006年03月	早稲田大学高等学院「研究年誌」第50号，pp.113-129	五島列島にみる綱引（14事例）について現地調査から得られた情報と文献資料から、綱引の変容とそれを構成する諸要素（実修地・期日、綱の観念、性観念、綱の処理）についての比較考察を行ったものである。
15. 蹴鞠の系譜に関する一考察（査読付）	単	2006年03月	スポーツ史学会「スポーツ史研究」第19号，pp.41-45	長崎県五島列島にみる民俗ボールゲームを事例として、狭義の蹴鞠との系譜関係を論じ、次の仮説を提示した。 ①国家の領域観念：中世期、国家がケガレを放逐する過程に伴って地理的移動、すなわち文化伝播したものであり、また、それが文化変容した姿である。 ②ケガレ放逐機能：ボールゲームにはケガレ浄化機能が内包されており、ボールをゴールラインの向こう側、すなわち境外に蹴り出すことで、ケガレが放逐され、コート内が浄化されるという象徴性が含まれている。
16. Identity seen in the Acculturation of Sumo done by Native Taiwanese,Chihpen Puyuma（査読付）	単	2006年	日本体育学会国際誌「International Journal of Sport and Health Science」Vol.4 Special Issue 2006,pp.110-124	台湾先住民のプユマ（卑南族）で実修されている相撲とそれによって形成されるアイデンティティを論じたものである。研究方法としては、フィールドワークに基づくデータと日本統治時代の文献資料、それぞれの文化分析の揺らぎをとらえその考察を行った。台湾先住民研究史において、相撲やスポーツによるアイデンティティ形成の問題はこれまでまったく取り上げられてこなかった題材である。
17. 五島列島にみる伝統的ボールゲームと蹴鞠の相関関係について:蹴鞠の文化伝播の問題	単	2005年03月	早稲田大学高等学院「研究年誌」第49号，pp.117-124	五島列島にみられる伝統的ボールゲームに注目して、狭義の蹴鞠との文化的相関関係について論じ、二つの知見を提示した。今日みるこれらのボールゲームは蹴鞠が文化伝播してものが後年、独自の文化変容を遂げたものであること。また、蹴鞠様式確立期の中世の国家領域観念から考えるならば、ボールを外へ蹴り出すという行為には、ケガレを放逐することによりコート内（自領域）が浄化されるという象徴的性が含有しているのではないかと推論づけた。
18. 台湾プユマの伝統行事にみる「相撲」	単	2004年03月	早稲田大学高等学院「研究年誌」第48号，pp.1-13	台湾先住民プユマ族の諸集落で実修されている「相撲」について、聞き取り調査を基に日本統治下における原住民社会と教育行政との関係から論じたものである。もともとプユマ伝統の相撲マリウォリウォスがあったところに、日本相撲がもたらされ、プユマの文化システムによって適応的な文化変容を遂げた。これは、日本統治下において他の原住民社会とは異なり、普通行政区であったことにより、公学校教育が実施されたことの影響が大きいことを明らか

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				にした。
19. Squamish Days Loggers Sports 調査報告（査読付）	共	2003年03月	日本スポーツ人類学会「スポーツ人類學研究」第４号，pp.41-47	カナダにおけるきこりのスポーツ大会の調査報告である。Loggerは木を切ることを職業としている者を意味する。つまりこの大会は、そうした人々が集い、伐採作業をスポーツとして競技化したものである。競技には、木登りや早切り競争のほか、斧投げや綱結び競争などが行われる。本稿は、それぞれの競技とその競技の状況を詳述した。 著者：早稲田大学スポーツ人類学研究室（一階千絵、幸喜健、 渡邉昌史 、田里千代、寒川恒夫） 共同研究につき本人担当分抽出不可能
20. カナダのFirst Peoples Festival におけるダンス（査読付）	共	2003年03月	日本スポーツ人類学会「スポーツ人類學研究」第４号，pp.49-55	2001年夏に実施された、カナダにおける「ファースト・ピープル（First People）」と自称する、いわゆる先住民族による祭典の調査報告である。1985年から開催されているこのフェスティバルは、カナダの中でも最も盛大に行われる先住民族の伝統、芸術を含んだ文化全般を祝う祭典の一つである。ここでは特に、民族舞踊に注目し、それぞれの民族集団に特有なダンスを、その象徴的意味を含めて報告した。 著者：早稲田大学スポーツ人類学研究室（一階千絵、幸喜健、 渡邉昌史 、田里千代、寒川恒夫） 共同研究につき本人担当分抽出不可能
21. 少数民族政策からみた現代中国社会の研究：中華人民共和国・少数民族伝統体育運動会を事例として	単	2003年03月	早稲田大学高等学院「研究年誌」第47号，pp.55-64	中国・少数民族運動会をめぐる少数民族のアイデンティティについての考察を行ったものである。少数民族運動会は少数民族としてのエスニシティ、中国人民としてのナショナリティという二つのアイデンティティを発現させる文化装置として機能していること。一方で、民族融和政策を進める中国では、少数民族にとってはエスニシティとナショナリィの相克が、国家にとってはそのバランスが大きな課題となっていることを明らかにした。
22. 2001年世界柔道選手権大会男子優勝者の競技特徴として	共	2003年03月	財団法人全日本柔道連盟強化委員会科学研究部「柔道科学研究」第８号，pp.12-26	2001年７月にドイツ・ミュンヘンで開催された世界柔道選手権大会の男子７階級及び無差別で優勝した７名について、全試合を撮影したビデオテープから競技分析を行い、その競技的特徴を明らかにするとともに、今後の指導の一助とすべく論文としてとりまとめたものである。 著者：若山英央、村山晴夫、林弘典、 渡邉昌史 、中島裕幸、奥超雄、山本洋佑 共同研究につき本人担当分抽出不可能
23. モンゴルの民族意識：民族スポーツにみるエスニシティ	単	2002年08月	自由社「自由」第44巻第８号，pp.56-66	モンゴルにおけるナーダムという民族スポーツを通じて、モンゴル民族のアイデンティティを論じたものである。 ナーダムはチンギス・ハーンからの伝統の上に位置付けられ、モンゴル民族のエスニシティの確認、活性化、強化の文化装置として機能していること。出自、文化を共有するという客観的な定義としての民族集団の側面にみならず、エシニシティ定義の上で不可欠な、民族意識という主観的側面の存在も認められることを論証した。
24. The Loch Lomond Highland Games 2000 調査報告（査読付）	共	2002年03月	日本スポーツ人類学会「スポーツ人類學研究」第３号，pp.55-62	スコットランドにおける民族スポーツ大会「The Loch Lomond Highland Games」の調査報告書である。ハイランドゲームズでは、重量競技としてケーバー投げ、ハンマー投げ、石投げ、錘投げ、投擲競技、レスリングが行われる。また、バグパイプを伴奏にしたハイランドダンシングと呼ばれる舞踊のコンテスト形式の競技も見られた。本稿では、これらの競技について詳しく報告した。 著者：早稲田大学スポーツ人類学研究室（一階千絵、幸喜健、 渡邉昌史 、瀬戸邦弘、田里千代、寒川恒夫、波照間永子） 共同研究につき本人担当分抽出不可能
25. スウェーデン・ゴトランド島の民族スポーツ大会（査読付）	共	2002年03月	日本スポーツ人類学会「スポーツ人類學研究」第３号，pp.63-72	スウェーデン・ゴットランド島の民族スポーツ大会「ストンガスペレン」の調査報告である。当該国の民族スポーツが集中して行われているこの大会では、ペルク、ヴァルパ、ストング投げ、ゴットランド五種競技、余興的競技が行われた。ここでは、それらの各種目についての実施状況を報告した。 著者：早稲田大学スポーツ人類学研究室（一階千絵、幸喜健、 渡邉昌史 、瀬戸邦弘、田里千代、寒川恒夫、波照間永子） 共同研究につき本人担当分抽出不可能
26. モンゴルのエスニシティについての一考察：ナーダムにみるエスニシティ	単	2002年03月	早稲田大学高等学院「研究年誌」第46号，pp.47-57	モンゴル国で行われている「ナーダム」について、「権力とスポーツ」の観点から分析・考察を行った。ナーダムはもともと伝統的祭礼行事であったものが、社会主義政権下においてはマルクス主義の権力装置へと変容、さらに民主化を契機としてモンゴル

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				民族のアイデンティティを確認、強化、再生産する文化装置として機能していることを明らかにした。
27. 福江市下崎山のヘトマトにみる文化変化	単	2002年03月	「20世紀日本社会における民族スポーツの文化変容」平成９～12年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）研究成果報告書　研究代表者　寒川恒夫，pp.264-272	研究協力者として長崎県を担当。福江市（現、五島市）のヘトマト（国指定無形民俗文化財）を一つのスポーツ文化複合ととらえ、文化変容の考察を行った。
28. 中国第６回少数民族伝統体育運動会北京大会調査報告（査読付）	共	2001年01月	日本スポーツ人類学「スポーツ人類學研究」第２号，pp.87-95	1999年９月に北京にて、中華人民共和国第６回少数民族伝統体育運動会が開催された。本稿は現地調査に基づき大会の変遷、実施された競技・種目のルールや結果、その歴史などについて多数の写真と共に報告したものである。 著者：早稲田大学スポーツ人類学研究室（ 渡邉昌史 、瀬戸邦弘、内田君子、寒川恒夫、李承洙、鈴木みづほ） 全編を執筆
29. 中国第６回少数民族伝統体育運動会拉薩大会調査報告（査読付）	共	2001年01月	日本スポーツ人類学会「スポーツ人類學研究」第２号，pp.97-105	1999年８月に中国西蔵自治区拉薩で中華人民共和国第６回少数民族伝統体育運動会が開催された。本稿は現地調査に基づき、実施された競技・種目のルールや結果、その歴史などについて多数の写真と共に報告したものである。 著者： 渡邉昌史 、瀬戸邦弘、内田君子、寒川恒夫、李承洙、鈴木みづほ 全編を執筆
30. モンゴルの民族スポーツ調査報告（査読付）	共	1999年12月	日本スポーツ人類学会「スポーツ人類學研究」第１号，pp.89-98	モンゴル国における民族スポーツの祭典「ナーダム」の調査報告である。ナーダムは「男の三種の競技」と呼ばれ、相撲、競馬、弓の大会が催される。それに付随した形で「シャガイ」と呼ばれる羊のくるぶしの骨を使った、モンゴルの伝統的な的当て遊びの大会も開催される。ここでは、それら三種の競技とシャガイについて報告した。 著者：早稲田大学スポーツ人類学研究室（李承洙、大枝茂、 渡邉昌史 、内田君子、瀬戸邦弘、寒川恒夫） 共同研究につき本人担当分抽出不可能
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
1. 甲子園與觀光／甲子園とツーリズム	単	2015年04月25日	2015節慶、遊戲與觀光國際學術研討會（台湾師範大学）主催：國立師範大学、臺灣身体文化学会，基調講演	百周年を迎える「夏の甲子園」は1915年、高校生による中学野球振興、鉄道会社の沿線開発、新聞社の部数拡大の思惑が一致して始まった。３回より会場とななった「甲子園」は阪神電鉄の積極的な戦略により、一大スポーツパークとなった。これは戦前におけるスポーツツーリズムの完成であったといえよう。今日では、「甲子園」はブランド化し、「高校生の日本一」といった意味を持つようになってきている。
2. 台湾原住民の土俵をもつ相撲―文化としての本質主義と異種混交性―	単	2012年04月	「台湾原住民族の音楽と文化」国際学術シンポジウム（天理大学)主催：天理大学・天理大学附属天理参考館・国立台東大学	「台湾原住民族の音楽と文化」をテーマにした、日本で最初の国際シンポジウムでの報告である。 台湾原住民族の知本プユマの収穫祭で実修されている「相撲」について、行われる場である収穫祭との関連のなかで「文化」がどのように形成され、固定化されてきたのかを報告した。収穫祭はキリスト教の影響を排除する本質性を求め正統化されたのに対し、相撲は日本文化の影響を含んだ異種混交であることによって正当化された。
3. ポストコロニアルにおけるフィールドワークを考える：臺灣原住民知本プユマの相撲変容にみるアイデンティティ	単	2005年11月	日本体育学会第56回学会大会スポーツ人類学専門分科会（筑波大学）キーノートレクチャー	ポストコロニアルの状況下における、フィールドワークの方法論による文化研究について、特にフィールドワーカーとして現地の人々といかなる関係を築き、どのような姿勢で研究に取り組んできたかについて論じた。台湾先住民の意識では、今日においてもなお「外来政権の統治下」にあるといえる。このようななかで「語り」と「書く」こと。そして、「書く／書かれる」ことの問題点について、経験を踏まえ説明した。
２．学会発表				
1.　「国技館」という空間にみる文化表象：相撲常設館開館から昭和初期の国技概念成立期までに注目して	単	2016年08月25日	日本体育学会第67回学会大会スポーツ人類学専門領域（大阪体育大学） 一般研究発表	本研究は、大相撲が「国技」として広く認識されるに至った経緯について、「国技館」という空間との関係性から明らかにしようとするものである。具体的には、国技館開館から昭和初期の国技概念成立期に国技館で開催された相撲以外のイベントに注目し、それらの分析をおこなうことによって、国技館という空間にみる文化表象を論じるようとするものである。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
2. 日常語としての「国技」概念の形成：朝日新聞データーベースを用いての考察	単	2016年05月13日	2016年第４回アジアスポーツ人類学会（台湾師範大学）	創刊当初は、「国技」ワード件数は相撲興行よりも、「国技館」にておこなわれていたサーカス、菊人形展、活動写真を伝える記事・広告の方が多い。1914年１月、安倍磯雄によって「国技とは何か」問題提起がなされた。これに刺激を受け、相撲界の現状を報じる記事が増えるとともに、相撲界自体も「国技」を意識した論を展開することとなり、結果として「国技」を扱った記事は増加して行った。紙上をにぎわす「国技」記事の増加の過程のなかで、日常語としての「国技」概念の形成が進んだといえよう。 ※「優秀論文賞」受賞
3. スポーツ空間の整備と国民統合の論理	単	2015年08月25日	日本体育学会第66回学会大会スポーツ人類学専門領域（国士舘大学）一般研究発表	橿原道場は1940年、「建国の聖地」橿原神宮の附帯施設として造営された、明治神宮外苑競技場に比する規模の文化・スポーツ施設であった。 橿原道場設立の背景には、「建国のシンボル」橿原神宮を最大限に活かした「国民統合」の論理があり、それに便乗した資本の論理、さらにはこれらに呼応した国民のチカラがあった。
4. 「橿原道場」設立に関する一考察	単	2014年11月30日	平成26年度奈良体育学会大会	戦前の奈良においては春日野運動場、そして「橿原道場」という全国でも屈指のスポーツ施設が存在していた。本研究では、橿原神宮においてスポーツ施設が設置された経緯を探ることによって、橿原道場成立までの過程を明らかにした。
5. 中世絵巻物にみる武芸修練法	単	2014年09月26日	2014節慶、運動、儒学文化國際學術研討會（台湾・台南大学）口頭発表	13世紀に作られた「男衾三郎絵詞」を題材にして、そこに描かれている武士の武芸修練法についての考察を行った。本絵巻は中世の東国武士の生活が丹念に描かれている。奇抜なストーリーが展開するなかで、戦闘場面のほか、合戦にそなえる武士の鍛錬の様子が武具の手入れから弓の稽古に至るまで克明に描かれている。その情景はむしろ他の絵巻物などの合戦場面にはない現実感があり、絵師が日ごろから関心をもって観察していたであろうことが伺える。そこで、この場面を検討することにより絵師の目を通した武士の武芸修練法を明らかにした。 ※「優秀論文賞」受賞
6. 奈良公園におけるスポーツ施設の変遷と「奈良ブランド」構築	単	2014年08月27日	日本体育学会第65回学会大会スポーツ人類学専門領域（岩手大学）一般研究発表	奈良公園は1880年開設以来、近代化、観光化と自然美のせめぎあいのなかで公園整備・改良が進められ、昭和初期には関西屈指の「娯楽施設」となった。1988年、スポーツ施設はすべて撤去されたが、そこで希求されたのは「近代」を「古都奈良」の中心から周縁に移すことによる「古都」としての真正性の確保であった。よって、奈良公園からのスポーツ施設の撤去は、奈良公園それ自体を「文化財」化させてゆく流れのなかに位置づけられよう。奈良公園よりスポーツ施設の撤去、すなわち「近代」を放逐すること、「近代」との差異化を通じて「古都奈良」としての奈良ブランドが完成することとなったのである。
7. 帝国日本の植民地における「国技」相撲の諸相と展開	単	2014年03月	日本スポーツ人類学会第15回学会大会（東京学芸大学）	帝国日本の植民地であった台湾で開催されていた「高砂族相撲大会」を事例として、台湾総督府等の記録及び雑誌記事と当事者の個人的記録、いわば「たてまえ」と「本音」との比較から、植民地で展開されていた「国技」相撲の実際を明らかにし、「国技」が植民地においてどのように受容されたのかについて論じた。
8. 絵馬に描かれた身体及び技芸の表象分析	単	2013年10月	2013運動文化國際學術研討會(台湾・台北海洋技術学院)口頭発表	絵馬図柄に託された人々の願いうち、身体と技芸に関わるものを抽出してその記号を読み解いた。発表では写真を多用して外国人にも理解し易いように工夫し、絵馬に描かれたコードの分析を報告した。 ※「優秀論文賞」受賞
9. 新聞報道にみる戦時下の初等教育学校在籍児童の集団遊戯における社会情勢の影響からの変容についての一考察	単	2013年08月	日本体育学会第６４回大会スポーツ人類学研究領域（びわこ成蹊スポーツ大学）一般研究発表	子どもは遊びによって内的欲求を満たすとともに、他人との関わりや社会の中で生きていくうえで必要な知識や行動、すなわち社会性を身につけてゆくとされる。 本研究では戦時下における子どもの遊びの変容について、新聞報道を分析することにより、社会情勢の影響を受けて変化した子どもの遊びに投影された価値観を読み解いた。
10. 公園空間における文化表象の変化：奈良公園にみるスポーツ施設の変遷	単	2013年03月	日本スポーツ人類学会第14回学会大会(金沢大学）一般研究発表	奈良公園は大正末期から「近代」にふさわしい公園として、スポーツ施設が次々と整備されて行くことによって、信仰者だけのものであった「聖地」が市民に開放された近代の公園へと姿を変えた。戦後しばらくまでは、スポーツの「聖地」としての一面をもっていたのである。昭和30年代以降、風致整備のために公園内のスポーツ施設が徐々に除去されて行くことにより、こんにち見る風致景観が創られてきた。奈良公園はモダンなスポーツ施設の開設によっ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				て「近代」の公園となり、その除去によって古都イメージの象徴となったのである。
11. 絵馬に託されたコード：描かれた身体とわざ	単	2012年08月	日本体育学会第63回学会大会スポーツ人類学専門分科会（東海大学） 一般研究発表	絵馬は民間信仰を基盤として伝承され、慣習化されたものであり、神仏に対する願掛けは他人にあからさまにできない事柄が極めて多い。そこに絵馬の図柄に託された人と神仏のコミュニケーションが存在する。本研究では絵馬に描かれた身体及び技芸の表象を分析することによって、その記号を読み解いた。
12. 「武道」の教育的効果の普遍性に関する一考察	単	2011年09月	日本体育学会第62回学会大会スポーツ人類学専門分科会（鹿屋体育大学）一般研究発表	中学校学習指導要領には、武道の学習を通じた「伝統な行動の仕方」「伝統的な考え方」の修得が謳われている。しかしながら、ここで言う「伝統的」とは何か、国際スポーツではなく武道であらねばならない理由等については明確にしていない。そこで、体育学会という学際的な場に鑑み、武道の教育的効果の普遍性についての考察を行った。具体的には比較の座標として、戦時下の武道奨励策にみる「教育的価値」を事例として用いた。
13. 近代国語辞典にみる「国技」概念変容と日本文化の形成	単	2011年06月	2011慶祝建國百年節慶與賽會國際學術研討會（台湾・建国科技大学）	日本において、国技と呼ばれる相撲は近代以降、「伝統」を再構成することにより、「純粋な日本文化」の身体的実践として創られてきた。他方、国語辞典は近代国家としての共通語「国語」確定のための文化装置であり、そこには二つの性格、すなわち歴史的記述性、規範性を有している。本発表では大相撲にみる文化要素の再構成の過程及び、近代国語辞典54種にみる「相撲」及び「国技」の語釈の変化から、日本文化形成の問題を論じた。
14. 国民文化としての「国技」相撲の誕生	単	2010年11月	アジアスポーツ人類学会第１回学会大会（国立オリンピック記念青少年総合センター）口頭発表	大相撲は近代日本の純粋な日本文化の実践として創られてきたものである。いわば「伝統の創造」「伝統の再構成」といえる。そこで、大相撲の文化要素がどのように変容して、今日みる大相撲の様式美となったのか、そのプロセスを外国研究者に判りやすいように報告した。
15. 日本統治下における台湾原住民の儀礼スポーツの変容：台湾総督府による「理蕃」政策の影響を中心に	単	2010年09月	日本体育学会第61回学会大会スポーツ人類学専門分科会（中京大学）一般研究発表	台湾原住民の儀礼及び実修されているスポーツが「理蕃」政策によってどのように変容したのかを、諸記録の分析から明らかにした。総督府は「文明化」「内地化」を推進するが、直面した課題が煩雑かつ、長期間にわたる祭祀儀礼であった。祭祀儀礼の「善導」による儀礼及びスポーツの変容を次の６点に集約することができる。①日本的農村化、②合理化、③神社崇拝との一体化、④空間の喪失、⑤世俗化、⑥媒介者（ミドルマン）の存在
16. Consideration about the "National Sport" Concept Creation in the Japanese Sumo	単	2010年05月	III International Conference of Physical Education and Sports Science 2010（シンガポール・南洋大学）ポスター発表	In Japan, the recognition to assume sumo "the national sport" is firmly established widely. However, the beginning of sumo is not so old, and an influential theory states the time when particularly started named "National Sport Hall" in the sumo hall establishment of 1909. By quoting an ancient myth for the modern Japanese formation period, sumo has been giving an impression as if whether the sumo was continued from the ancient times. Sumo has to be made as "Japanese culture" in the nation state. This study considers a process of creation of the "national sport" concept in the sumo from the change of a lasting ceremonious element of sumo.
17. 「国技」概念創出時期査定のための基礎的研究：近代国語辞典にみる「国技」概念変容について	単	2010年03月	日本スポーツ人類学会第11回学会大会（名桜大学）一般研究発表	大相撲は近代日本の純粋な日本文化の実践として創られてきたものである。一方で、相撲という文化装置によって、文化共同体としての「日本」の身体的表象を求めたとき、「相撲は国技である」という命題は自明の理とされている。これらの問題意識から、近代国家としての共通語である「国語」確定のための文化装置である国語辞典にみる「相撲」及び「国技」の概念変容から、「国技」概念創出時期の査定を行った。
18. 知本プユマの相撲にみる文化変容：身体文化の歴史的経験	単	2009年11月	アジアスポーツ人類学論壇（北京・清華大学）一般研究発表	台湾原住民知本プユマにおいて実修されている相撲について、歴史的文脈のなかで読み解いたものである。もともとは組み相撲マリウォリウォスがあったが、日本統治期に日本相撲が持ち込まれた結果、知本相撲への変容をみた。そして戦後の中国化の歴史的文脈のなかで再解釈されローカル化した姿が今日みる知本相撲といえる。知本相撲には彼らの歴史的経験がシンボライズされ埋め込まれていることによって、「固有伝統文化」となっている。
19. 海外強豪選手の映像収集及び選手へのフィードバックシステムの確立	共	2007年01月	第４回ＪＩＳＳスポーツ会議ポスターセンッション（国立スポーツセンター）	（財）全日本柔道連盟協会員会科学研究部では、国立スポーツ科学センターの委託研究として、これまで構築してきた強豪選手のデータベースへの更新作業を行うと共に、2007年世界選手権大会、2008年北京

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				オリンピックへ向けての情報収集，整理と選手・コーチへのフィードバックについての報告を行った。発表者：木村広、射手矢 岬、春日井淳夫、中村勇、南條充寿、矢野勝、林 弘典、 渡邉昌史 、瀬川洋、久保田浩史、桐生習作、田中勤、村山晴夫、中島裕幸、奥超雄、渡辺直勇、佐藤伸一郎、坂本道人、小室宏二、曽我部晋哉、廣瀬伸良（全日本柔道連盟強化委員会科学研究部）
20. プユマ相撲の文化変容：カティプル・プユマの事例と中心として	単	2005年03月	日本スポーツ人類学会第６回学会大会（神戸研究学園都市大学交流センター）一般研究発表	台湾先住民プユマの諸集落で実修されている、あるいは過去において実修されていた相撲について、フィールドワークによるデータ及び文献資料から報告した。
21. 日本の海洋権益：東シナ海の排他的経済水域の問題を中心に	共	2004年11月	早稲田大学アジア研究フォーラム（早稲田大学）ポスター発表	早稲田大学危機管理研究会の共同研究（田中伯知、福地建夫、大島信三、 渡邉昌史 ）の成果報告である。 共同研究につき本人担当分抽出不可能 2004年５月以来、東シナ海の排他的経済水域の日中境界線付近での中国側の天然ガス採掘が両国の深刻な外交問題となっている。こうした日中間の経済水域をめぐる対立は東アジアにおける重大な潜在的な紛争要因の一つとして注目を集めてきた。今回は、①国連海洋条約、②日本の海洋政策を背景にこの課題にアプローチし報告を行った。
22. 台湾原住民の民族スポーツ：プユマ（卑南族）を事例として	単	2004年09月	日本体育学会第55回学会大会スポーツ人類学専門分科会（信州大学）一般研究発表	台湾先住民プユマで実修されている民族スポーツ（相撲、マラソン、ダンス、ブランコ）について、フィールドワークによるデータ及び映像資料から報告した。台湾先住民の民族スポーツのデータベース化を視野に入れて、その第一歩として行った。
23. 台湾総督府の統治政策による「高砂族」の祭祀・伝統儀礼の変容	単	2004年03月	日本スポーツ人類学会第５回学会大会（北海道大学）一般研究発表	日本統治時代に台湾総督府が展開した「理蕃」政策(先住民に対する教化・殖産的皇民化政策)によって台湾先住民の伝統的祭祀・儀礼がどのような変化を経験したかについて、文献資料から考察し報告した。
24. “Sumo” as a traditional festival: A case study of Puyuma in Taiwan	単	2003年12月	The 5th Seminar of History in Physical Education & Sport for North Eastern Asia（台湾・嘉義）	台湾先住民研究史において、これまでまったく取り上げられてこなかった「相撲」について、プユマのフィールドワークによるデータと文献資料の分析から報告した。
25. プユマの伝統行事にみる民族スポーツ：中華民国台湾・台東市知本の収穫祭を事例として	単	2003年09月	日本体育学会第54回学会大会スポーツ人類学専門分科会（熊本大学）一般研究発表	台湾先住民プユマの「収穫祭」でおこなわれている民族スポーツ（マラソン、相撲、ダンス）について、現地調査をもとに報告を行った。さらに今後の研究の展開として、これらにみられる日本の文化的影響についてどのように研究を進めてゆくかの分析視点を明示した。
26. 国家政策としての中国少数民族伝統体育運動会	単	2003年03月	日本スポーツ人類学会第４回学会大会（早稲田大学）一般研究発表	中国・少数民族運動会について、国家政策からの分析・考察を行った。そして、少数民族運動会は少数民族としてのエスニシティ、中国人民としてのナショナリティという二つのアイデンティティを発現させる文化装置として機能していること。その一方で、民族融和政策を進める中国では、少数民族にとってはエスニシティとナショナリィの相克が、国家にとってはそのバランスが大きな課題となっていることを明らかにした。
27. 権力装置としての民族スポーツ：モンゴル国のナーダムを事例として	単	2002年10月	日本体育学会第53回学会大会スポーツ人類学専門分科会（埼玉大学）一般研究発表	モンゴル国では毎年７月に国家的祝祭「ナーダム」が開催され、そこではブフ（モンゴル相撲）、競馬、弓射が繰り広げられている。本発表では「権力とスポーツ」の観点からナーダムを分析し、もともとは伝統的祭礼行事であったものが、社会主義政権下ではマルクス主義の権力装置へと変容、さらに民主化を契機としてモンゴル民族のアイデンティティを確認、強化、再生産する文化装置として機能していることを明らかにした。
28. 「文化の伝播」からみた蹴鞠に関する一考察	単	2001年09月	日本体育学会第52回大会一般研究発表（北海道大学）	長崎県五島列島にみられる蹴鞠に類似するゲームを対象として、フィールドワークに得られた情報と文献資料の分析により、蹴鞠の地理的移動、すなわち文化伝播の仮説を提示した。蹴鞠は王権と密接に結びついたスポーツであることから、研究の視点を蹴鞠が一定の様式を確立しつつあった中世期に求め、歴史学の身分制研究の成果であるケガレの観念と国家の領域観念の２点から論を展開した。
29. 五島列島にみる民族スポーツについて	単	2001年09月	2001中・日・韓運動人類學國際學術研討會（台湾・台北師範学院）一般研究発表	長崎県五島列島にみるさまざまな民族スポーツの事例について紹介するとともに、五島列島の地理的状況に鑑み日本という枠組みではなく、東シナ海を媒介とする東アジア文化圏のなかに位置づけ、これらの事例について比較考察を行った。
30. 五島列島の綱引にみる文化変化	単	2000年10月	日本体育学会第51回学会大会スポーツ人類学	長崎県五島列島の現地調査に基づき、そこで実修される綱引について、時期、対抗組の編成、綱観念、

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
			専門分科会（奈良女子大学）一般研究発表	綱の処理法から考察を行った。綱の象徴性は顕著ではないが、その多くが正月に実修されていることから、水稲耕作の儀礼的意味が付随されているであろうこと。一部の事例においては、近世以降の漁民の移動による上方文化の複合がみられることを明らかにした。
31. 福江市下崎山のヘトマトにみる文化変化	単	2000年03月	日本スポーツ人類学会第１回学会大会（早稲田大学）一般研究発表	長崎県五島列島の福江島、福江市下崎山に伝わる国指定民俗文化財「ヘトマト」（相撲、羽付き、綱引、玉蹴り）を一つのスポーツ文化複合ととらえ、実地調査からその変化の考察を行った。担い手集団の変化により、対抗の図式も地区対抗から年齢階梯的なものへと代わったこと。また、それにより年占としての意味合いが薄まる結果になったが、一方では地区住民のヘトマトに対する帰属意識が高まったことを明らかにした。
３．総説				
1. スポーツのモノ語り第26回　「節」をつくり、つなぎ、実を結ぶ	単	2016年02月	大修館書店「体育科教育」第64巻第2号，pp.1-4	スポーツにおける「つなぐ」行為について読み解いた。①国際スポーツをめぐる世界はオリンピックが、これを取りまく社会、経済、あらゆるものごとの「節」となっている。②リレーは「他者と自己をつなぎ、実を結ぶ」ものであるが、文化によって受け継ぐモノ・行為の意味が異なる。③相撲における力水で「水」は相撲社会におけるあらゆるチカラを象徴し、つなぐ行為である。③プロ野球におけるリリーフカーは日本独自の時短のためものであったが、球場構造の変化により見られなりつつある。
2. スポーツのモノ語り第25回　スポーツの感動を伝え、夢をつむぐメディア	単	2016年01月	大修館書店「体育科教育」第64巻第1号，pp.1-4.	メディアによって紡ぎだされるスポーツにおける物語りについて読み解いた。①ＰＶ（ﾊﾟﾌﾞﾘｯｸﾋﾞｭｰｲﾝｸﾞ）によって「感動の共有」から「感情の共感」へと、スポーツにおける楽しみ方のコペルニクス的転回が起きつつある。②これまで、プレーの臨場感を伝えるためにさまざまな工夫がなされてきた。甲子園におけるプレヨグラフ（競技板）、ラジオでは「実感放送」から「実況放送」へ、街頭テレビ。③今日、３Ｄ立体など現実を超えたリアルが求められるようになった結果、「スポーツするのは、人でなければならないのか」ということが問われるようになっている。
3. スポーツのモノ語り第23回　守り、かぶり、おおう～スポーツにおけるアタマの世界～	単	2015年11月	大修館書店「体育科教育」第63巻第11号，pp.1-4.	スポーツにおける「かぶり物」について、読み解いた。 ①剣道の面の格子の一部を透明にした面が世に出たが普及を見なかった。能面のように表情を隠す必要があるからである。②ヘルメットが象徴的なアメフトはラグビーを発展させたものであり、ラグビーの肉体礼賛からアメリカ的な合理的、物質主義の思想が読み取れる。③マスクは没個性の一方で、日常性からの解放との役割もある。スポーツでもマスク装着が非日常へ、競技者への変身のステップとなっている。④馬の矯正具、アスリートのイヤホン、両者に共通するのは情報を遮断することによる、感覚の鋭敏化であり、そこには優勝劣敗の世界がある。
4. スポーツのモノ語り第21回　用具をつくり、絵を描き、説明して伝える～スポーツを学ぶための本モノ～	単	2015年09月	大修館書店「体育科教育」第63巻第9号，pp.1-4.	スポーツを伝え・学ぶためのモノについて、読み解いた。日本の近代化にあたって、社会と文化に大きな影響を与えた「翻訳」。欧米からもたらされたスポーツの黎明もまた、用語の翻訳と軌を一にしてきた。①ベースボールから野球へ（日本人初の野球単行本『野球』が著されたことによって、訳語が確定し、スポーツの用語の漢語化も進んだ）、②人間の活動を絵で表し、命名する（17世紀、教育学者のコメニウスによって編まれた『世界図絵』は、正解最初の絵入り教科書であり汎知学の全体像、その一翼をスポーツが占めている）
5. スポーツのモノ語り第19回　泳ぐ、漕ぐ、潜る～水をめぐる技と身体～	単	2015年07月	大修館書店「体育科教育」第63巻第7号，pp.1-4.	水をめぐる技と身体について、読み解いた。①近代泳法で２番目に速いバラフライの特徴的な技「ドルフィンキック」は、いわばケガの功名によって完成をみたこと、②日本泳法で臨んだ1920五輪は惨敗、西洋泳法の習得によって「水泳ニッポン」となったが、これは速さを尊ぶ競泳の話。日本泳法独自の遠泳など、泳法には自然観の違いが投影されている。③不世出の格闘家のなかには、和船の櫓を漕ぐことによって強靭かつしなやかな足腰が鍛錬された。④かつて海の中を自由に行動するのは夢であったが、フリーダイビングでは水深00ｍまで潜っている。水の中から生まれた生命を進化させてきた人類、水をめぐる技と身体は今後どのように変化して行くのだろうか。
6. スポーツのモノ語り　第17回　図像から読み解くスポーツ・遊び	単	2015年05月	大修館書店「体育科教育」第63巻第5号，pp.1	図像からスポーツ・遊びを読み解いた。①ルネッサンス期の寓意画「なわとび」には、身体活動として

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
３．総説				
			-4.	の積極的な評価はなく、むしろ否定的であること。②明治時代の「引札」には、近代スポーツに刻印されたのと同様に同じヨーロッパ的価値観が投影されていること。③明治期のスポーツを素材とした風刺画には、切り取られた時代相が読み取れること。④1964東京五輪ポスター及びピクトグラムから、情報をそぎ落とすことにより、かえって情報を伝えることが可能となること。
7. スポーツのモノ語り第15回　スポーツの「聖地」をひも解く	単	2015年03月	大修館書店「体育科教育」第63巻第3号，pp. 1-4.	スポーツをめぐる「聖地」について解説した。神宮外苑になぜスポーツ施設ができたのか？。近代化と奉納行為が融合して日本スポーツの「聖地」となった。奈良大仏の眼下にグラウンドがあったが、「古都奈良」とするために排除された。政治体制下では新聞社の事業としてつくられた総合スポーツ・文化施設があった。甲子園も企業戦略によって誕生、戦前までは一大スポーツパークであった。
8. スポーツのモノ語り第14回　運か実力か～遊ぶモノでみるスポーツ今昔モノ語り	単	2015年01月	大修館書店「体育科教育」第63巻第1号，pp. 1-4.	スポーツをテーマにした「双六」から、日本スポーツ界の今昔世界を説いた。日本スポーツ界の黎明期、モガに象徴される新しい女性たちによって女性スポーツの道が拓かれた大正、日本選手が国際的な活躍を見せ始めた昭和初期、戦災からの復興を勇気づけた終戦後。双六にはスポーツにおける「必然」、サイコロによる「偶然」の相反する面白さが凝縮されており、さながら人生の絵巻の如し。
9. スポーツのモノ語り第11回　記憶に刻まれる味わい深いモノ～スポーツと食べ物	単	2014年11月	大修館書店「体育科教育」第62巻第12号，pp. 1-4.	ある「におい」を嗅いだとき、記憶が呼び起されることがある。脳の構造上、においは記憶と感情と密接に結びついている。古代オリンピックにおける饗宴、国技館における焼き鳥、メジャーリーグでのホットドックについて概説し、バーチャルスポーツの時代の今日ではにおいは再現されることはないが、「食べる」という実体験を共有すること、共通の経験となって行くことを論じた。
10. スポーツのモノ語り第10回　メビウスの輪が語るモノ～スポーツと下着	単	2014年10月	大修館書店「体育科教育」第62巻第10号，pp. 1-4.	サッカーW杯での下着露出騒動からスポーツと下着の関係について解説した。女性スポーツの歴史は矯正下着からの解放に始まること、「見せない」はずの下着が今日では」見せる」モノに変わることによって、スポーツの価値も新しく創造される可能性があることを「メビウスの輪」をたとえに写真を多用して説いた。
11. スポーツのモノ語り第９回　支えられ、支え…。「サポーター」の美学	単	2014年09月	大修館書店「体育科教育」第62巻第9号，pp. 1-4.	サッカーW杯におけるサポーターの「ごみ拾い」から説き起こし、日本人サポーターの日本的価値観に基づく行動は、日本初の新たなスポーツ文化創造の可能性を世界に示したこと。装着具のサポーターにまつわる秘話について概説した。
12. スポーツのモノ語り第７回　浴びる、泳ぐ身体。見せる、魅せる水着	単	2014年07月	大修館書店「体育科教育」第62巻第7号，pp. 1-4.	スポーツにおける「モノ」に焦点をあて、それをめぐる歴史・文化について解説する企画である。日本における海水浴の始まりと意味合いの変遷、水着の変遷と水泳競技の関わりについて概説した。
13. スポーツのモノ語り第５回　ニセモノ？ホンモノ??～芝と土	単	2014年05月	大修館書店「体育科教育」第62巻第5号，pp. 1-4.	スポーツにおける「モノ」に焦点をあて、それをめぐる歴史・文化について解説する企画である。グランドにおける芝生について、今日のように常緑化されるまでの経緯、人工芝から天然芝への回帰、心理的効果をねらう青色トラックの登場などについて概説した。
14. スポーツのモノ語り第３回　人馬一体のモノ語り	単	2014年03月	大修館書店「体育科教育」第62巻第3号，pp. 1-4.	スポーツにおける「モノ」に焦点をあて、それをめぐる歴史・文化について解説する企画である。競争で勝つために交配・淘汰されてきた生きた馬。乗馬技能の向上をはかるために生き馬から木馬へ変化、さらには体操器具へと発展した経緯についてを概説した。
15. 「総合型クラブが求められる背景と意義」「スポーツの楽しみ方の新提案：「する」「みる」「ささえる」から「つくる」たのしみも」	単	2010年02月	奈良県総合型地域スポーツクラブ情報誌「ＳＣネットなら　2010」	総合型地域スポーツクラブが求められている背景について、スポーツの意義から説き起こし、分かりやすく解説した。合わせて、スポーツの楽しみ方として、クラブづくり（スポーツをする環境づくり）もあることを説いた。
16. 柔道年表　1956年～1965年	単	2009年03月	(財)全日本柔道連盟強化委員会科学研究部「柔道科学研究」第14号，pp. 34-47	柔道界の動向について国内・国外に分け、詳細な年表とした。
17. 「総合型クラブが求められる背景と意義」「総合型地域スポーツクラブＱ＆Ａ」	単	2009年02月	奈良県総合型地域スポーツクラブ情報誌「ＳＣネットなら　2009」	総合型地域スポーツクラブが求められている背景について、スポーツの意義から説き起こし、分かりやすく解説した。
18. スポーツは「人」を育てるか：スポーツ文化論の視点から	単	2008年11月	奈良県スポーツ指導者研究会	財団法人日本体育協会公認スポーツ指導者資格の研修会において実施した講義録。
19. 柔道年表　1945年～1955年	単	2008年03月	(財)全日本柔道連盟強化委員会科学研究部「	日本傳講道館柔道が「競技化」「国際化」して行く過程を1945年から1955年までの国内外の動向を詳細

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
３．総説				
			柔道科学研究」第13号，pp.28-39	に示した。
20. スポーツ観戦の楽しみ方あれこれ	単	2005年03月	（財）日本体育協会「Sport JUST」第416号，pp.22-23	スポーツの楽しみ方は人それぞれである。応援の仕方も競技によって異なり、競技特性と相まって独特の応援文化を形成している。野球においても日本プロは組織立った鳴り物使用に対し、大リーグは鳴り物禁止。サッカーはかつてホーンが代名詞であったが、今日では声援のみ。武道では特に剣道で拍手・声援禁止と精神性が強調される。また、大相撲観戦の焼き鳥のように、スポーツ観戦のなかには「食べる」楽しみも含まれている。
21. 世界で最も盛んなスポーツは何ですか	単	2005年02月	（財）日本体育協会「Sport JUST」第415号，pp.22-23	世界で最も盛んなスポーツは何か。スポーツの持つ楽しみ方には「おこなう」と「観る」がある。これらのバロメーターは前者はスポーツ人口であり、サッカーが全世界的な普及に対し、野球はアメリカと文化的に強く結び付いている地域に限定される。後者の「観る」ではサッカーのW杯は全世界の人が４回以上視聴し、アテネ五輪の延べ視聴者は400億人。答えはサッカーのようでもあるが、歴史・文化的背景によって異なる。
22. 人間の尊厳守れるか：機械化進む競技審判	単	2005年02月	（財）全日本弓道連盟「弓道」第657号，pp.40-41	スポーツ界において、「誤審」を防ぐため、あるいは「正確な判定」のためとして、ビデオ判定やさまざまなハイテク機器が導入されている。しかし、人間がおこなう営みであるスポーツの判定を機械に委ねてよいのかという倫理的な問題はほとんど問われていない。これは、いわば司法の場をコンピューターに委ねるようなもので、人間の尊厳にかかわる重大な問題なのではないだろうか。これらの問題提起をおこなった。
23. 成人式にバンジージャンプ？：通過儀礼とスポーツ	単	2005年01月	（財）日本体育協会「Sport JUST」第414号，pp.32-33	「成人式にバンジージャンプを」といったら、新成人はさぞかし驚くことであろう。しかし、これは本当の話で、メラネシアのペンテコスト島では実際におこなわれている。成人式、もしくは通過儀礼の観点から世界各地の民族スポーツを紹介するとともに、社会生活のトレーニングの場としてかつての「若者宿」を紐解き、そこから今日の学校教育におけるスポーツ活動、地域のスポーツクラブの重要性を判りやすく説いた。
24. スポーツに誤審はつきもの？：ハイテクでミスは防げないの	単	2004年12月	（財）日本体育協会「Sport JUST」第413号，pp.22-23	スポーツは人間が審判をおこなうことによって成り立っている。ミスをしない人間はいないので、ミスは避けられないといえる。そこで誤審問題が起きると必ず議論されるのが機械を使った判定である。ハイテク社会の今日、ビデオ導入などの審判の機械化によって誤審を防ぐことは可能なのか。さまざまな競技の事例を紹介するとともに、その倫理的な問題についても取り上げた。
25. 動物スポーツって？：動物をめぐるスポーツ文化	単	2004年06月	（財）日本体育協会「Sport JUST」第408号，pp.22-23	アザラシの「タマちゃん」が人気になるなど、「癒し」がブームとなっている。一方で、世界各地にはアザラシの剥製をボールにしたラグビーや、頭を切り落とした羊を用いての騎馬ラグビーがおこなわれている。国際スポーツの視点からみれば、これらは「残酷」「野蛮」にも映り、英国では狐狩りがキリスト教的倫理観から禁止された。しかし、世界には多様な文化が存在しており、世界基準で一律には判断出来ないことを説明した。
26. ルールがスポーツを世界の共通言語にさせた!?	単	2004年04月	（財）日本体育協会「Sport JUST」第407号，pp.22-23	高校野球では試合前後になぜ「礼」をするのだろうか。「マナーと文化」の視点からスポーツを分かりやすく説いた。集団のなかでの決まりごとを「文化コード」という。スポーツの世界には文化コードが深く刻み込まれており、これを共有することによってコミュニケーション（試合）を成り立たせている。但し、文化コードは絶対的なものではなく、文化によって異なる相対的なものであることを説明した。
27. 相撲は日本だけのものではないのですか	単	2003年09月	（財）日本体育協会「Sport JUST」第401号，pp.34-25	平成15年７月場所では東西の横綱にいずれも外国出身の力士が並び、「国技」相撲も国際色が豊かになった。大相撲力士の「多国籍化」による決まり手の変化から、これらの力士は出身地の民族相撲をベースにして、その技を相撲に持ち込んだであろうことを説明した。また、世界各地にみられる民族相撲は、それぞれの民族の文化を反映してさまざまな形でみられること。そして、盛んにおこなわれていることを紹介した。
28. 柔道では、何段がもっとも強いのでしょうか	単	2003年08月	（財）日本体育協会「Sport JUST」第400号，pp.32-33	柔道をはじめとして武道には段位制度が設けられ、社会的にも一種のステイタスを示すものとなっている。しかし、一般にはその制度と実力の関係がよく理解されていない。そこで、柔道の段級制度、昇段資格を説明し、段位と実力が結び付くのかどうかと

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
３．総説				
				いった疑問について解説した。柔道の本質・理念から、段位はたんに実力を示すものではないことから、「試合での強さ」とは必ずしも結び付かなくとも矛盾しないことを説いた。
29. 世界各地の相撲＆レスリング	単	2002年11月	日本スポーツ出版社「2004「総合＆組技格闘技」選手名鑑」pp.244-245	相撲（英語ではレスリング）は、素手組み討ち格闘技のことで、もっぱら投げることで相手を倒すスポーツである。相撲は数ある人類の格闘技のなかでも最も古いものの代表であり、地域と文化を問わず、地球上の多くの民族によっておこなわれている。これらの相撲について、先行研究から約150の事例を一覧表にして紹介した。
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 柔道科学研究　第20号	共	2015年12月31日	(財)全日本柔道連盟強化委員会科学研究部	編集主幹
2. 柔道科学研究　第19号	共	2014年12月31日	(財)全日本柔道連盟強化委員会科学研究部	編集主幹
3. 柔道科学研究　第18号	共	2013年03月31日	(財)全日本柔道連盟強化委員会情報・戦略部	編集主幹
4. 柔道科学研究　第17号	共	2012年03月31日	(財)全日本柔道連盟強化委員会情報・戦略部	編集主幹
5. 柔道科学研究　第16号	共	2011年03月31日	(財)全日本柔道連盟強化委員会情報・戦略部	編集主幹
6. 柔道科学研究　第15号	共	2010年03月31日	(財)全日本柔道連盟強化委員会情報・戦略部	編集主幹
7. .奈良県総合型地域スポーツクラブ情報誌「ＳＣネットなら　2010」	単	2010年02月	財団法人奈良県体育協会・奈良県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会	奈良県における総合型地域スポーツクラブの育成推進のために、県内クラブの紹介及びクラブが求められる意義と背景の解説書として刊行した。財団法人奈良県体育協会クラブ育成アドバイザーとして企画・編集・執筆を全て１人で担当。
8. 柔道科学研究　第14号	共	2009年03月31日	(財)全日本柔道連盟強化委員会情報・戦略部	編集主幹
9. .奈良県総合型地域スポーツクラブ情報誌「ＳＣネットなら　2009」	単	2009年02月	財団法人奈良県体育協会・奈良県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会	奈良県における総合型地域スポーツクラブの育成推進のために、県内クラブの紹介及びクラブが求められる意義と背景の解説書として刊行した。総合型クラブ紹介誌は本県初のものである。　財団法人奈良県体育協会クラブ育成アドバイザーとして企画・編集・執筆を全て１人で担当。
10. 柔道科学研究　第13号	共	2008年03月31日	(財)全日本柔道連盟強化委員会科学研究部	編集主幹
11. 柔道科学研究　第12号	共	2007年03月31日	(財)全日本柔道連盟強化委員会科学研究部	編集主幹
12. 柔道科学研究　第11号	共	2006年03月31日	(財)全日本柔道連盟強化委員会科学研究部	編集主幹
13. 柔道科学研究　第10号	共	2005年03月31日	(財)全日本柔道連盟強化委員会科学研究部	編集主幹
14. 柔道科学研究　第９号	共	2004年03月31日	(財)全日本柔道連盟強化委員会科学研究部	編集主幹
15. 柔道科学研究　第８号	共	2003年03月31日	(財)全日本柔道連盟強化委員会科学研究部	編集主幹
６．研究費の取得状況				
1. 日本体育学会スポーツ人類専門分科会平成23年度研究助成補助金	単	2010年		「近代語『相撲』における概念変容について：新聞報道にみる「相撲」表象からの分析」
2. 文部科学省科学研究費　基盤研究（B）		2004年～2005年		東アジアにおける民族スポーツの観光化変容
3. 日本体育学会スポーツ人類専門分科会平成16年度研究助成補助金	単	2004年		「台湾の内地化と原住民アイデンティティ：台湾総督府の統治政策による祭祀・伝統儀礼の変容」
4. 文部科学省科学研究費　若手研究（B）	単	2004年～2005年		「東北アジアにおける伝統スポーツとアイデンティティの関係に関する研究」 研究課題番号：16700474
5. 日本体育学会スポーツ人類学専門分科会平成13年度研究助成補助金	単	2003年		「天神信仰による綱引の文化変容についての研究：京都から瀬戸内航路を経て五島列島に至るまでの地域を対象として」

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1. 2009年4月～2010年3月	奈良県総合型地域スポーツクラブ育成委員会委員
2. 2008年4月～2009年1月	奈良県スポーツ振興審議会専門委員

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
3. 2006年4月～2008年3月	財団法人全日本柔道連盟　大会事業委員会委員
4. 2006年4月～2010年3月	文部科学省委託事業総合型地域スポーツクラブ育成推進事業　総合型地域スポーツクラブクラブ育成アドバイザー
5. 2001年1月～現在	公益財団法人日本オリンピック委員会　強化スタッフ（情報戦略）柔道
6. 1999年1月～現在	公益財団法人全日本柔道連盟　強化委員会科学研究部員
7. 1996年04月～2016年03月	公益財団法人全日本柔道連盟　広報委員会　委員